様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８４１５８

研究課題名（和文）武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質

研究課題名（英文）Study for description of social phase in the middle Kofun period with the armors buried in the mound.

研究代表者
上野　祥史（UENO, Yoshifumi）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授

研究者番号：９０３３２１２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　 12,800,000円

研究成果の概要（和文）： 本研究は武装具を集積して保有（副葬）する現象に注目して、古墳時代中期社会の特質を描くことを目的とする。奈良県円照寺墓山1号墳の出土資料を対象として、集積して保有した武装具の実態を明らかにし、それを起点として武装具を媒介とした政治秩序を評価した。古墳時代中期の基準資料を現代的視点で整理し、今後の武装具研究に供する基礎情報を作成した。武装具を授与した王権の視点と保有した地域社会の視点で同古墳を評価し、朝鮮半島出土の倭系武装具を対照することで、倭王権の企図する政治秩序で果たした武装具の意義と特質に対して議論を展開した。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on the phenomena to bury several sets of armors in the mound and purposes to discuss the peculiarity of the society in the middle Kofun period.
First we drew the precise figures of such famous armors of the mound “Enshouji-Hakama No.1” as standard material, and analyzed them on the viewpoint of recent study. Based on the result, we focused on the distribution of armors and discussed either the governing system of the Yamato polity or the position of them on the network of the local elites. Referring on the system, we focused on the armors excavated in Korean Peninsula. With the comparative analysis, we discussed the formation of the system. At the international symposium on 5th Mar 2016, we discussed these themes with Korean scholars.
Besides the archaeological study, the physical and chemical analyses were operated. But for few samples, we contributed to construct the frame of chronological calendar for the discussion of the middle Kofun period.

研究分野： 考古学

キーワード： 考古学　古墳時代　武装具　王権　威信財

１．研究開始当初の背景

古墳時代中期は、首長間の緩やかな人格的結合に基づいた政治関係が一つの極点に達した時代である。器物の授受や古墳の築造を媒介として、王権中枢は地域社会との関係を構築し維持した。帯金式甲冑や刀剣・鉄鏃などの武器と武具で構成する武装具すなわち「武の装い」が、この時期の政治構造を表象する象徴的な器物であった。

武装具の研究は1990年代から2000年代にかけて、製作技術に注目した緻密な型式学的研究が進み、この型式編年をもとに武器・武具の生産動向が整理され、武装具の生産と配布を管理した王権の戦略へと議論が進んだ。

それを背景に近年では武装具を集積した古墳の再評価が進んでいる。熊本県マロ塚古墳出土資料や大阪府七観古墳出土資料を対象とした研究であり、他にも奈良県五条猫塚古墳や兵庫県雲部車塚古墳などを対象とした研究が進められた。いずれも、古墳時代中期あるいは武装具の集積現象を検討する基準資料だが、早期の発見にかかり報告が古く、現代的な視点で基礎情報を提供することが必要な資料群であった。これら諸研究は、研究基準資料の基礎情報を現代的視点で提示しており、学界で高く評価されている。

その中でも、奈良県円照寺墓山１号墳出土資料は、武装具の型式学研究でも武装具の集積現象の検討でも注目されるが、現代的視点での検討を要する資料である。過去において、以前に国立歴史民俗博物館と東京国立博物館とが共同して調査研究を推進した資料でもあり、それを継承し発展させ、現代的視点での基礎情報の整理と評価が望まれている。

２．研究の目的

本研究では、武装具が古墳に集積する現象に注目し、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。

基準資料の基礎情報を現代的視点で学界に提示することを第１の目的とし、他の事例との比較を通じて武装具の集積現象を整理すること、日本列島内外の視点からその意義を評価して、古墳時代中期社会の特質を検討することを第２の目的とする。

第１の目的に対しては、奈良県円照寺墓山１号墳を研究対象として設定した。同資料は、武装具を集積した古墳であり、武装具研究において基準となる資料であるが、報告が古く、現代的研究視点での整理・検討を必要とする資料である。

第２の目的に対しては、武装具の集積現象を日本列島内外の視点で比較し、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という３つの視座から検討する。

３．研究の方法

まず、東京国立博物館が所蔵する円照寺墓山１号墳より出土した資料を対象に、考古学的分析と理化学的分析をおこない、より詳細な情報を収集して提示する。

武装具を中心に、円照寺墓山１号墳出土資料の製作年代や技術系譜を明らかにし、様式という視点から日本列島に最大規模の前方後円墳を築造した時期の武装具の実態を明らかにする。

そして、七観古墳やマロ塚古墳を対象にした先行研究の成果や他の事例との比較を通じて、古墳時代中期社会において武装具が集積する現象の意義を検討する。

一つは、武装具保有の秩序における集積現象の意義を明らかにすることである。王権と地域という二つの視点に立ち、武装具の分与者と受給者の双方の視座を対照して、王権が意図した政治秩序における武装具の集積現象の意義を評価する。

もう一つは、その武装具を媒介とした秩序を相対的に評価することである。馬具や鏡など他の器物にみる関係と比較すること、あるいは朝鮮半島での倭系武装具と比較することにより、古墳時代中期社会の特質を追究し、本研究の論点を集約する。

なお、考古学研究視点での検討等と併行して、理化学分析により古墳時代中期の枠組を提示する。鉛同位体比分析や AMS 炭素 14 年代測定などの理化学分析を進め、技術系譜や暦年代の情報を蓄積することにつとめる。

４．研究成果

（1）円照寺墓山１号墳出土資料の整理

第１の目的である、奈良県円照寺墓山１号墳出土資料については、高精度の実測図をほぼ完成させた。

1930年代以後､本格的な整理が行われておらず、形状が判明する大型破片以外は、ほぼ当時の状態で保管されていた資料に対して、悉皆調査をおこなった。ほぼ３年にわたる時間を費やし、小破片も含めて全面展開作業をおこない、接合確認と図化作業を進めた。

その結果、帯金系の甲冑をはじめ、現有の資料員数を確定させ、かつその型式学的位置づけを確定させた。

古墳時代武装具研究の基本文献である末永雅雄著『日本上代の甲冑』に大きく貢献した重要資料に対して、現代の研究水準で基礎情報を提示する意義は大きい。

オーソドックスな方法ではあるが、今後の研究の基礎を再構築するという重要な意

義を有しているとみたい。

（2）武装具の基本概念：名称・分類

円照寺墓山 1 号墳出土資料の整理を進める中において、名称や分類基準にも検討をおこなった。100 年余の学史を回顧し、有職故実を基礎にした認識を相対化し、中国・朝鮮半島との資料にも対応しうる認識、分類基準、名称について、議論を重ねた。「短甲」「小札甲」という通称を考証し、その当否を問うた。円照寺 1 号墳の資料情報も、こうした認識に基づいて整理をおこない、新たな武装具研究を提起すべく、論点を集約した。

（3）授与という視点での集積現象の評価

武装具の授与を通じた関係性について、円照寺 1 号墳出土資料を王権＝分与者の視点で評価した。

まず、詳細情報を基礎として、同墳の武装具がその製作年代を新古 2 相に区分できる可能性を明らかにした。出土遺構・状況を対照して、被葬者数の確定と、副葬品の帰属を検討し、2 基以上、最大で 4 基の埋葬施設を推定した。活動時期の異なる被葬者が複数混在した状況を明らかにした。

新古 2 相の武装具が組合う背景を、鏡や馬具など他の器物を比較して検討をおこなった。当墳では製作年代と時期を大きく隔てた長期保有鏡を含むため、製作から入手、保有から副葬への時間相をどのように捉えるのか、鏡と甲冑を比較して検討した。その過程において、鏡は王権中枢が保有した鏡を武装具とともに分与を受けたと理解し、当該地域での長期保有には否定的な見解を提示するに至った。

（4）保有という視点での集積現象の評価

円照寺墓山 1 号墳を中期の奈良盆地という時空間で検討し、武装具の授与を通じた関係性を地域社会＝受給者の視点で評価した。武装具の生産や大型古墳の築造に見いだせる王権中枢とは距離を置いた当地域が武装具を集積したことの意義を、現地踏査もふまえつつ、当該地域の歴史地理環境を反映させて理解した。

当地域の特殊性、近接する東大寺山古墳などとの関係、王権を構成する成員層における位相等について、円照寺墓山 1 号墳での武装具集積保有という視点から評価を展開した。

また、朝鮮半島で出土する倭系武装具についても検討をおこなった。朝鮮半島での保有状況を対比することで、日本列島内部での武装具を介した秩序とその機能を相対化させて評価した。倭の論理を貫徹した理解と、三国社会での保有意義・価値を対照させて倭系武装具を評価し、一元的ではない倭系武装具の意義と、入手プロセスの詳細な議論を整理した。

（5）国際シンポジウムでの報告

2016 年 3 月には、歴博国際シンポジウムを開催し、セッション 1「朝鮮半島の倭系甲冑からみた日韓相互交渉」を構成した。研究で蓄積した授与・保有をめぐる様々な論点を、朝鮮半島出土の倭系武装具を対象とした検討に反映させた。同資料は、武装具の授与と保有の意義を本質的に問う資料であり、日韓の研究者の議論を通して、武装具を介した倭王権の秩序を改めて問い直した。集積現象の背景にある武装具の秩序そのものを検討する試みであった。

（6）理化学分析の進展

AMS 炭素 14 年代測定により暦年代の枠組構築に寄与することと、鉛同位体比分析等により金工の技術系譜の理解を深化させることを通じて、考古学研究とは異なる視点で古墳時代中期の実態や特質へと接近するものである。

古墳時代中期の暦年代は、相対的年代観を点的な紀年銘資料と碑文・史書等の文献記録に接続するものであり、今なお議論が継続している。暦年代の枠組みを整備することは重要な研究課題の一つでもある。

AMS 炭素 14 年代測定では、鹿児島県神領 10 号墳出土土器や静岡県山ノ花遺跡出土土器など、古墳時代中期を中心に分析をおこなった。すべての測定が現在想定される古墳時代の暦年代観と符合したわけではないが、中には、中期中葉（TK216 型式期）に 5 世紀前葉の年代を想定できる結果も含まれている。古墳時代の暦年代体系確立に向けた情報の蓄積をおこなった。

武装具の集積現象を日本列島内部における「王権」と「地域」との関係だけでなく、「東アジア」という視点もふまえて評価した。こうした特色や独創性を背景として、本研究では武装具の保有・集積現象を通じて、古墳時代中期社会に対する新たな認識とそれを多面的に提示しうる情報を獲得しえたものと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 18　件）

川畑　純「古墳時代中期における甲冑の配布と入手の一様相」『古代武器研究』vol.10, pp.15-26, 2014 年.

橋本達也「古墳時代前期甲冑の形式・系譜・年代論」『前期古墳編年を再考～広域編年再構築の試み～』中国四国前方後円墳研究会大 17 回研究集会発表要旨集・資料集, pp.91-100, 2014 年,

諫早直人・鈴木勉「古墳時代の初期金銅製品生産－福岡県月岡古墳を素材として－」『古文化談叢』第 73 集，pp.147-209，2015 年.

橋本達也「状態の良好な武具など大量の副葬品」『季刊考古学』第 133 巻，pp.91-92，2015 年.

上野祥史「漢代物質文化と鉄器」『中国考古学』第 15 号，pp.41-54，2015 年.

橋本達也「古墳時代前期甲冑の形式・系譜・年代論」『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集，pp.1-16，2016 年.

鈴木一有「朝鮮半島出土倭系武装具の全容」『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集，pp.17-32，2016 年.

金赫中「韓半島三国社会の視点から評価した倭系武装具」『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集，pp.33-48，2016 年.

洪潽植「韓半島における倭系武装具の意義」『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集，pp.1-16，2016 年.

坂本稔・上野祥史・鈴木一有「山ノ花遺跡出土土器の付着炭化物の炭素 14 年代測定」『浜松市文化財調査報告』平成 27 年度，pp.104-109，2017 年.

阪口英毅「甲冑研究の動向―2010 年代を中心に―」『考古学ジャーナル』vol.701, pp.5-9, 2017 年

阪口英毅「中期古墳編年と甲冑研究」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ～広域編年と地域編年の齟齬～』中国四国前方後円墳研究集会第 20 回集会，pp.47-60，2017 年.

齋藤　努「志段味大塚古墳出土資料の鉛同位体比分析結果」『志段味古墳群Ⅲ』名古屋市埋蔵文化財調査報告書 77，pp.115-117，2017 年.

齋藤　努「帯金具の金めっき層の分析結果」『志段味古墳群Ⅲ』名古屋市埋蔵文化財調査報告書 77，pp.118-119，2017 年.

上野祥史「鏡・耳飾」『福井市天神山古墳群再考　シンポジウム資料集』pp.39-45，2017 年.

阪口英毅「天神山 7 号墳出土甲冑の基礎的検討」『福井市天神山古墳群再考　シンポジウム資料集』pp.65-76，2017 年.

上野祥史「古墳時代における鏡の分配と保有」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 211 集，pp.79-110，2018 年

川畑　純「古墳時代甲冑の系統と授受」『史林』第 101 巻第 1 号，pp.1-39，2018 年.

〔学会発表〕（計 6　件）
川畑　純「古墳時代中期における甲冑の配布と入手の一様相」（第 10 回古代武器研究会，2014 年 3 月 1・2 日，於山口大学）

橋本達也「古墳時代前期甲冑の形式・系譜・年代論」（中国四国前方後円墳研究会第 17 回研究集会，2014 年 11 月 30 日，出雲弥生の森博物館）

橋本達也「古墳時代中期の武装具体系とその意義」（歴博国際シンポジウム「古代日韓交渉の実態」，2016 年 3 月 5・6 日，於国立歴史民俗博物館）

鈴木一有「朝鮮半島出土倭系武装具の全容」（歴博国際シンポジウム「古代日韓交渉の実態」，2016 年 3 月 5・6 日，於国立歴史民俗博物館）

諫早直人「韓・倭の馬具－栄山江流域出土馬具を中心に－」（歴博国際シンポジウム「古代日韓交渉の実態」，2016 年 3 月 5・6 日，於国立歴史民俗博物館）

齋藤努「鉛同位体比からみた志摩地域出土青銅製品の原料産地推定」（おじょか古墳発掘 50 年記念シンポジウム『おじょか古墳と 5 世紀の倭』，2017 年 11 月 4 日）

〔図書〕（計　2　件）

上野祥史・高田貫太編『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集，総ｐ.136，2016 年.

橋本達也・中野和浩編『島内 139 号地下式横穴墓』Ⅰ，えびの市教育委員会，総 p.110，2018 年.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
上野祥史（UENO, Yoshifumi）
国立歴史民俗博物館･研究部･准教授
研究者番号：90332121

(2)研究分担者
橋本達也（HASHIMOTO, Tatsuya）
鹿児島大学・総合研究博物館・教授
研究者番号： 20274269

古谷　毅（FURUYA, Takeshi）
京都国立博物館・学芸部考古室・主任研究員
研究者番号：40238697

齋藤　努（SAITO, Tsutomu）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：50205663

阪口英毅（SAKAGUCHI, Hideki）
京都大学・文学研究科・助教
研究者番号：50314167

坂本　稔（SAKAMOTO, Minoru）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：60270401

諫早直人（ISAHAYA, Naoto）
奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：80599423

杉井　健（SUGII, Takeshi）
熊本大学・大学院人文社会科学研究部・准教授
研究者番号：90263178

(3)連携研究者
高橋　工（TAKAHASHI，Takumi）
研究者番号：00344367
大阪市博物館協会・大阪文化財研究所・調査課長

清水和明（SHIMIZU，Kazuaki）
研究者番号：60344363
大阪市博物館協会・大阪文化財研究所・事業企画課長

(4)研究協力者
鈴木一有（SUZUKI, Kazunao）
川畑　純（KAWAHATA, Jun）
西嶋剛広（NISHIJIMA, Takahiro）
松崎友理（MATSUZAKI, Yuri）
金宇大（KIM, WooDae）